

# 肉筆簡牘文字を基盤とした作品制作

中村 拓也 (大 郁)

Takuya (Taiku) Nakamura

一九三〇(三一年)、スウェーデンのスウィン・ヘディン団長、フオルケ・ベルグマン、黄文弼らが合同で参加した西北科学考察団によつて内蒙古自治区額濟納河流域の漢代保壘址より簡牘約一一〇〇

〇点が出土した。これらの大量の木簡は、漢代の張掖群掖居延渠城とみられる地域から発見されたことから「居延漢簡」と呼ばれる。その後二度にわたつて発掘された木簡があるがこれらは「居延新簡」と呼ばれる。

内容は同年代とされる敦煌漢簡と同じく詔書・簿冊・信書等の文書類であり、九九術・干支表・歴譜・医薬方・古文書の残簡も含まれている。

「居延漢簡」の書体は波磔のない隸書(古隸とも称される)や八分隸のような隸書、更には章草といった多様性が見られる。これは出土簡牘の多さに起因していることは明らかであるが、これまでの隸変の定説を覆すには十分な資料であつた。この文字の過渡期にあ

つて、筆画の省略や章草の草書的表現にはこれまでの正式な隸書体とは異なり、躍動感のある書体は近年、臨書の対象としても注目されてきている。

今作は、「居延漢簡」を基盤としつつも同時代の肉筆文字資料などにも散見される、線の簡略化や線の繋がりを表現しようと「怡然」の二文字にて書き上げた。作品制作における対極の表現を取捨選択しながら、出来るだけ表現過多になりすぎぬように努めた。文字の過渡期における多様性をどこまで表現できるかを考えた際、まだまだ幅広い見識が必要となる。近年、新たな出土報告がなされているが、これから更に肉筆簡牘文字から目が離せない。今後、深く追ひ求めていきたい。



怡然

27.8cm × 45.3cm